チンギス・カンをめぐる伝説の諸相
—『チンギス・カンの伝説と歴史の地』という小冊子をもとに—

藤井　真湖

本稿は、2002年にモンゴル国で刊行されたN．ナムスライ編の小冊子に収められた42編のチンギス・カン関連の伝説をもとにその諸相を論じたものである。具体的にいえば、①伝説がときに旧ソ連批判の色合いをもつ政治的言説となっていること、②チンギスの生誕地をダダル村に求める筆者の意図が存在すること、③伝説に現れる地名が変化することがあること、④伝説のもととなる自然や遺物が変化することがあること、⑤伝説の古層として抽出しうるのが、チンギス個人よりもチンギスと愛憎入り混じる人物に着目したときに立ち現れること、とくにチンギスと婚姻関係を結びながらも敵対関係にあったタタル集団の存在が徐々に立ち現れてくること、である。

1．本稿の目的および資料の概要

ここに擦り切れた一冊のチンギス・カンに関する伝説集がある。手のひら大の厚さ2,3mmの全31頁の小冊子である。この小冊子を筆者は2007年9月21日、モンゴル国ヘンティ県ダダル・ソムにおいて宿泊していた旅館で偶然手に入れた。タイトルは『チンギス・カンの伝説と歴史の地』である[1)]。幸運なことに、この冊子を手に入れた直後この冊子に名前のあるナムスライという人物（以下、N氏）と会うことができた。N氏はダダル村出身者であり、たまたまウランバートルからダダルに帰郷していたのである。N氏によると、小冊子にある伝説は郷土史家でもある地元の先生—この人には会うことはできなかった—に聞いて書き留めたものである。N氏（1945年生まれ）の出身はホリ・ブリヤート族のホダイ（худай）・オボクで、現在はウランバートルの労働組合同盟に勤めている。ドイツの労働組合聯合大学にも留学したこともあるという。筆者には社会研究者であり雑誌記者でもあると自己紹介した。N氏によれば、単に伝説を聞き書きしたのではなく、ジャミヤン、ペルレー、バダムハタン等々のモンゴル学者の説も考慮に入れつつ叙述したという[2)]。残念なのは、この冊子の内容を精読する前に会ったため、冊子の内容についての確認がN氏からほとんどできなかったことである。本稿では、この小冊子（以下、N本）に収録されている42編の伝説を対象に、現在のチンギス・カン伝説の諸相を明らかにすることを目的とする。

モンゴルが1989年に社会主義体制から市場経済体制に移行して以降、チンギス・カンの評価は180度転換した。チンギス・カンは負の存在から一躍英雄の座に返り咲いたのである。これ以降、チンギス関係のありとあらゆる書物が続々と刊行されている。むろんN本もこうした時代の潮流を背景に刊行されたものである[3)]。本論執筆中に判明したことだが、この冊子の内容の大半はモンゴル国の口頭伝承と文学の著名な研究者であるモンゴル科学アカデミー言語文学研究所前所長の故サンピルデンデブ氏（以下、S氏）の編んだ『モンゴル国の伝説集』（以下、S本）にそのまま転載されている[4)]。S本はモンゴル国科学アカデミー言語文学研究所が随

時刊行しているモンゴル口承文芸叢書の第 25 巻として出版されているため今後多くの研究者が参考文献として用いることになるものと予想される。だが、N 氏の名前や出版場所や出版年は同書に一切記載されていないので、S 本からは N 本に辿りつけない。N 本の入手は今後難しいと思われるので、この冊子に記載されている伝説 42 編のタイトルを S 本に収録されている伝説との対応関係も入れて表 1 に示しておく[5]。紹介されている伝説の長さの目安として、1 行 6〜8 語で構成される伝説の行数も表中に記載した。また、S 本に N 本の別ヴァージョンが収録されている場合、S 本との対応の欄に＊印を付しておいた。

2．伝説の政治性

N 本の特徴として挙げられるのは、第 1 に、これがヘンティ県ダダル村出身者による伝説集であり、その土地をよく知っている人物が記述していることである。第 2 に、採録された伝説が別々の地域からのものではなく、ダダル村およびその近辺で採録されたという点で、これらの伝説がこの地域の地域的特性を示すものになっている可能性が高いことである。モンゴル研究者にはよく知られていることであるが、ヘンティ県ダダル村は、チンギスの生誕地であるデルーン・ボルドクの有力な候補地であるので、この意味は大きい。第 3 に、この伝説集はチンギス・カンに関する伝説と謳いながら、実際には、現代史に触れる記述が随所に織り込まれており、この意味でチンギスに関する「純粋な」伝説の書き方になっていないことである。これについては具体的事例がないと理解が難しいと思われるので、事例として第 1 話の「チンギスの石碑」を紹介しておこう。ただし紙幅の都合で改行はしていない。

(1) 1961 年の春、著名な政治家である D.トゥムルーオチルの提唱で党中央委員会の政治局の決定が出て、建築家 L.マフバルの指示とリーダーシップでモンゴルの大王チンギスの巨大で、威容を誇る肖像入りの碑をチンギスの生誕したダダル村のゴルワン・ノール（三つの湖）の中央の湖の北の小高い丘に建てた。この碑を建立するための仕事は厄介で数限りなくあったが、現地の多くの人々は全力でこの仕事にとりかかった。ひとつ例を挙げれば、82 歳の杖をついたジャミヤンという老人は身に余るような大きな 2 つの石を 3 km はなれた場所から背負って運んできた。碑の礎となる巨大な石を太陽に当てず地下を掘ってとり出し、当日の晩に運んできて、また暗闇の中で掘った穴に入れたのであった。その礎の穴も碑の高さと同様に、深さ 12 m、奥行き 9m、幅 5m であったという。碑が立った後まもなくして D.トゥムルーオチルと L.マフバルたちは粛正され、彼らの人生は失われた。まもなく、モンゴル人民革命党の中央委員会は、ダダル村の党細胞の長である G.ツェレンドルジに碑を取り壊すよう命じた。現地の人々は碑を取り壊すことに断固として反対した。そして、大王の命運を頼りにして、G.ツェレンドルジは勇敢にも「取り壊した」と虚偽の通知をしたことで、この碑は「炉」の上に永久に聳え立って残ったという歴史が現在に至って伝説となった。1999 年の夏、我々が現地に行ったさいに、私の三歳ほどの孫娘は、どこからどう聞いたのかわからないが、「モンゴルの碑を見に行こう」と言う。私は「そのモンゴルの碑とは何だ？」と驚いたところ、そのままチンギスの碑の方に歩いていった。私の孫は、碑のほうをまっすぐ見上げることができず威圧されて怖がっていた。そして、「これがモンゴルの碑というのは本当なのか」と聞いたので、「本当だ」と答えたのである。これは事実である。現在、この石碑は千年にひとり傑出した人物たるチンギスの石碑というばかりでなく、すべてのモンゴル人の象徴となり聳えているのである。

表１：　1～42のタイトルとＳ本所収の伝説との対応関係

番号	タイトル	行数	Ｓ本との対応
1	チンギスの石碑Чингисийн хөшөө	39	なし
2	ボルハントすなわちボルハン・ハルドゥンБурхант буюу Бурхан Халдун	25	８＊
3	テンゲレク小河Тэнгэлэг горхи	11	９＊
4	ブルテの高みБөртийн өндөр	11	１０
5	マラーの平原Марааны тал	10	１１
6	ドワ・ソホル、ドブ・メルゲンの碑Дува сохор Дову мэргэний хөшөө	6	1
7	碑の高みХөшөөтийн өндөр	8	１２
8	随一の高みТэргүүн өндөр	6	なし
9	トゴツォグの高みТогоцог өндөр	8	3
10	奴婢の絶壁Боголын гацаа	7	なし
１１	バルジ河の島Балжийн арал	10	4
１２	ボドンチャルの峡谷Бодончарын жалга	7	2
１３	種牛の河Бөх хүний гол　(※хүний は内容からみておそらく誤記であろう)	17	１３
１４	テムジンは天の出自の人であるТэмүүжин тэнгэр язгууртай хүн	8	１４
１５	デルーン・ボルドクДэлүүн болдог	18	なし
１６	チンギスの炉Чингисийн тоонто	30	１５
１７	傍の泉Хажуу булаг	12	１６＊
１８	鐙Дөрөө	5	１７
１９	最も優れた弓の射者の峠Мэргэн хөтөл	12	１８
２０	ベクトゥルの木Бөгтөр мод	12	6
２１	軍旗のオボТугийн овоо	10	２０
２２	バルチ・オボБарч овоо	15	２１＊
２３	お香台Сангийн тавиур	5	２２＊
２４	印璽の石Тамгын чулуу	14	２３＊
２５	サントハーン・オボ（サントハーンは地名）Сантхаан овоо	17	２４
２６	なべのある湖Тогоот нуур	11	なし
２７	秋営地Намаржаа	5	なし
２８	種雄ラクダの泉Бөөр булаг	6	２５
２９	チンギスのスルドЧингисийн сүлд	10	２６
３０	宝丘Эрдэнэ толгой	18	２７＊
３１	修理の丘Сэлбэгийн дэв	7	２８
３２	チンギスの馬の繋ぎ場Чингисийн морины уяа	5	２９
３３	チンギスの臍石Чингисийн хүйн чулуу	9	３０
３４	デゲン・ジゲン（デゲン、ジゲンともに人名）Дэгэн Жигэн	15	３１
３５	ベルグテイのいるところ、太鼓のあるところБилгүүт, Хэнгэрэгт	17	３２
３６	百の木Зуун мод	5	なし
３７	出会いの川Угалзар гол	9	３３
３８	フフチュ・シャマンの洞窟Хөхчү бөөгийн агуй	9	5，３４
３９	ヒョウルホン・ゴル（ヒョルホン川）Хёрхон гол	12	３５
４０	家石Гэр чулуу	5	なし
４１	ホルホノクの大オボХорхоногийн их овоо	6	なし
４２	チンギスの要塞道Чингисийн хэрэм зам	10	なし＊

ここで紹介されている「チンギスの肖像入りの石碑」は、ダダル村の象徴的オブジェとなっているもので、N本の表紙に描かれているだけでなく、日本の観光ガイドブックにも掲載されている有名なものである。ここで触れられているトゥムルーオチルの政治的失脚は社会主義体制の崩壊後、モンゴル現代史における暗部を物語る事件として公に語ることが許されるようになったテーマである。この話は記録者の伝説に対する態度がよく現れている事例となっている。チンギス・カンの伝説とは、決して12, 13Cの過去に属する事柄ではなく、現代史のひとこまだという眼差しがここには存在している。

S本において、この話は転載されていないもののひとつである。転載されなかった理由はおそらく、この話は「伝説」ではなく、「政治の話」ということになったのではなかろうかと考える。この事例に関していえば、「伝説」と「政治の話」との違いは明瞭に見える。しかし実際には、このような識別は意外に難しい。たとえば、35番目の「ベルグテイのいるところ、太鼓のあるところ」を見よう。

(35) ダダル村の北端のモンゴルーロシアの国境沿いに、「ベルグテイのいるところ、太鼓のあるところ」という場所がある。チンギス・カンは自分の故郷の北東部分を守らせるために、万戸〔モンゴル帝国の軍事単位―注筆者〕ごとに10人の兵士を出させて1000人にして、ビルグーテイ勇者（ベルグテイ勇者）に管轄させた。それ以降、チンギス・カンは大群を率いて西方に出征することになり、ビルグーテイ勇者を呼びにやらせた。ビルグーテイ勇者は、兵士たちに戦闘用の軍旗と大ラッパをもたせ、100人の兵士を伝令用の太鼓とともに残して出て行った。アルタイとハンガイの13山[6]を越えて戦ったその遠征からビルグーテイ勇者は戻ってこなかったという。そして、千人の兵士を支配していた地をビルグート（ベルグテイのいるところ）、告知用の太鼓のあった場所をヘンゲレクト（太鼓のあるところ）と呼ぶようになった。その後に、その太鼓はロシアの地にあるベルシーン寺院にもっていかれたが最終的にどうなったかの情報は途絶えてしまった。

(35) の話は、「伝説」でもあるが、やはり政治的な事柄に触れられており「政治の話」にもなっていることが観察される。前半が「伝説」、後半が「政治の話」と理解できるかもしれない。ただ、重要なのは、この後半の「太鼓がロシアに持ち去られた」という部分を、伝説の編者N氏だけでなくもともとの語り手も「はずせなかった部分」と考えたのではないかと推測されることである。「はずせなかった」という意味では、前述の (1) の言説もまさに同様であると考えられる。41番目の「ホルホノクの大オボ」もまた、同様に解釈できる言説となっている。(41) はS本には転載されていない話で、次のようなものである。

(41) 何百年か前に、家石〔(40) に出てくる地名―注筆者〕から北のモンゴルとロシアの国境の地に、国境の象徴として大きなオボを立てて、「ホルホノクの大オボ」と名付けた。近年、このオボは国境の向こう側に出てしまったので、こちら側の峠に小さなオボを立てて、「ホルホノクのオボ」と名付けている。

ここに登場するオボとは、主に山頂や峠につくられる円錐状に石を堆積したもので信仰の対象である。大小様々存在し、チベット仏教僧によって祀られる本格的なものから単なる道標になっているような小さなものまで種々ある。この（41）だけを見るかぎり、チンギス・カンといかなる関係があるのかは不明なのであるが、実は（39）と（40）にもホルホノクという河が登場し、この河はモンゴルの古典『モンゴル秘史』（以下、秘史）に登場するホルホノク・ジュブリ川ではないかとN氏は推測している。

ホルホノク・ジュブリとは秘史の§57，§104，§115，§116，§117，§201，§206の7箇所で登場する地名である[7]。初出の§57では、全モンゴルとタイチウト族とがクトラを皇帝とした場所として登場するほか、§206にもクトラの話に再言及されており、クトラ皇帝に関連の深い地名である[8]。また、それ以外はすべてジャムカに関わるものであるので、ホルホノク・ジュブリの土地が喚起させる第一のイメージは秘史においてチンギス・カンと近しい盟友関係にありながらも対立していくジャムカと結びついているといえよう。これについてはまた後で考察する。いずれにしても、この（41）の言説も政治的なメッセージをもっていることは間違いない。S本に転載されていない背景にはおそらく、ホルホノク・ジュブリが秘史に直接関わるものであるという内容が直接的に語られないままに国家間の境界の問題に触れることに対して、S本の編者が転載することを躊躇したのかもしれない。むろん、紹介した（1）、（35）、そして（41）は政治的な要素、もう少し明確に言うと、旧ソ連への批判が入っていることは事実であるが、批判だけでもない事例もある。次の（33）を見よう。

（33）何年も前に、（ゴルワン・ノール〔前出〕の）真ん中の湖の中央にある小丘の南部分にひとつの大きな黒い石があった。人々はその石を砕いてもってきて、北のロシアの国境を（一度）越えさせ（次に）南側のケルレンに輸出させて、「チンギスの臍を切った石である。熱を出した子供に良い」といって買っていたのであった。どの家でも問題なくそれを買っていたのであった。その石は、1920年代に湖の水に埋もれて見えなくなってしまったと老人たちは話している。

これは、旧ソ連時代にはチンギスはいわば「極悪人」扱いであったので、チンギス・カンにあやかる不思議な石の効用を得るために、モンゴル人はモンゴル国内で直接流通させることはできず、一旦ソ連を経由させソ連から逆輸入していたとする伝説らしい。これは旧ソ連への批判ということでは収まらない、モンゴル―ロシア関係の特殊な交易関係が暗示されている。

政治的文脈が反映されている以上のような伝説をみると、伝説はひとつの政治批判の隠れ蓑にもなりうることに気づく。このように考えると、13世紀ではなく20世紀以降の年代がN本において多く言及されている理由も納得される。伝説とは遠い過去の再現化という面ばかりではなく、この再現化の時点の人々の心性（メンタリティ）もまた再現するものだということが理解されるのである。

3．著者の意図

以上に挙げた4編はかなり政治的な問題に触れるものであるが、これら以外に直接的に政治

的だといえる事例はない。それゆえ、この4例を過大評価することは避ける必要がある。しかし、ここで留意すべきことは、伝説が政治的に無害なものであるとは限らないという点であろう（しばしば誤解されているように思われるのであえて言及しておく）。それは、次のような伝説にも別の意味で表われている。

(2) では、ボルハント山という山が 60,70 年前にはボルハン・ハルドンという秘史に登場する名前で呼ばれていたことに言及されている。ここには、ボルハント山というのが秘史に登場するチンギスの生命を守ったボルハン・ハルドゥン山その山なのであるとNが主張したいという願望が見え隠れしている。なぜなら、チンギス・カンの生まれたデルーン・ボルドクという故地の候補は、ダダル村の 100km ほど南西に位置するビンデル村にもあり、N氏は明らかにビンデル村説を快く思っていない態度を見せていたからである[9]。この点で、(2) のような伝説は、旧ソ連関連での言説よりも念入りな確認が必要であるように思われる。むろん、旧ソ連への批判も (2) の「60,70 年前」という年代に表われているといえるかもしれない。このN本が出版された 2002 年から言えば、1930 年代から 1940 年代に当たる。この時期は、もっともソ連の影響下での粛清が激しかった時代である。

(2) は伝説の編集者の意向が強く反映されている事例だが、こうした例は (3)、(13)、(39)、そして (15) にも見られる。(3) のテンゲレク小河の伝説は今述べた (2) と連動するものである。N氏はこのテンゲレク小河を秘史に6度現われるトゥンゲリク河に同定している[10]。秘史においてこの地名はチンギスから実質的にたどれる最古の祖先であるボドンチャルや、ボドンチャルの「父」であるドボン・メルゲンに関連するものである点で重要である。ボドンチャルの父を括弧付けで「父」とするのは、ボドンチャルは、ドボン・メルゲンの死後、母アランゴアが光に感じて妊娠して生まれているからである（図1・図2を参照）。秘史§5には、ドア・ソホルという人物がボルハン・ハルドゥン山からトゥンゲリク河に沿って移動している一行の中にいる美女アランゴアに目をつけ、弟のドボン・メルゲンに娶ってやったとある。この秘史の記述に引きづられて、N氏は (3) で彼がボルハン・ハルドゥンに同定するボルハント山から、このトゥンゲリクに同定するテンゲレク河の空間がはっきりと見えると書いているのではないかと推測される。そのほかに、1960 年代にこのあたりを調査した考古学者 Ts. ドルジスレン氏が同様に同定したことも書き添えている。

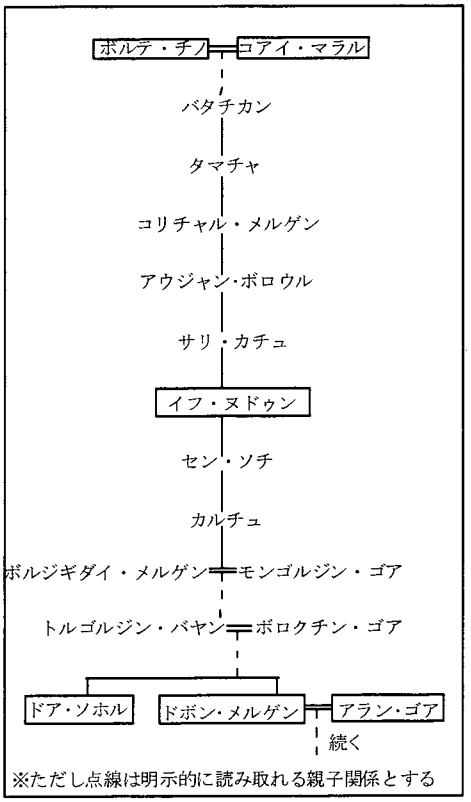

図1　モンゴル部の系譜その1
（秘史に基づき作成）

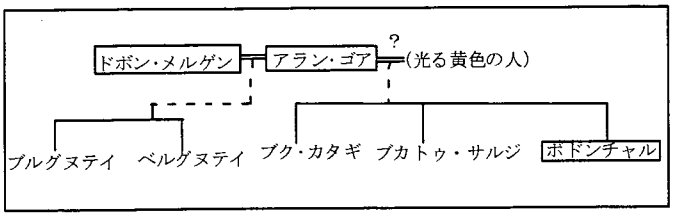

図２　ドボン・メルゲンから次の世代への系譜
（秘史に基づき作成）

（13）の「種牛の河」という伝説では、ブフ・ヌドゥン（ブフは「種牛」の意、ヌドゥンは「目」の意）という貧しい男が「種牛の河」から出てきた青い種牛のおかげで家畜が繁殖するようになり、その結果豊かになったという奇瑞（きずい）を物語るものである。N 氏はこのブフ・ヌドゥンを秘史に登場するイフ・ヌドゥン（イフは「大きな」、ヌドゥンは「目」の意）に同定している（図１参照）。イフ・ヌドゥンは秘史§2 に登場するチンギスの神話的祖先の１人の名前である[11]。（39）はヒョウルホン河（もしくはヒョルホン河）という実在の河名を、現地の人々が「ホルホノク」と呼んでいる事実を挙げて、秘史に登場するホルホノク・ジュブリであると同定しようとするものである（（41）についての前述の内容も参照）。だが（39）では現地の人々のこの呼び名は 60, 70 年前であるとしており、またもソ連主導の粛清時代の影を帯びている。著者の意図が政治性と純粋に切り離せえないこともあることを示唆する事例である。

（15）の「デルーン・ボルドク」はチンギスの生誕の地であると秘史§59 で明言されている地である。この点からみて、この伝説は重要であると思われるが、S 本には転載がない。S 氏によれば、同様の言説は多くの人が自分の故郷に仮託して語るものであるという[12]。S 氏がN 本のこの伝説をS本に伝説として収録しなかったのはこの理由に拠るのであろう。とはいえ、内蒙古の文学研究者トゥグスバヤル氏による別のチンギス伝説集には「デルーン・ボルドク」に関する複数のヴァリアントが掲載されているが[13]、出典をみると、すべて今論じているN本がもとになっているようである。それゆえ（15）を以下に訳出しておきたい。

（15）現在、我々がデルーン・ボルドクとみなしている地には、湖や水のあるところはなかったという。しかし、現在のゴルワン・ノール（三つの湖）の真ん中は、イェスゲイ勇者たちの家の跡があった丘である。ホエルン妃は、長男をここで出産したという。その息子は目には火があり、顔には熾のある、体が大きくて、右手にくるぶしほどの血の固まりを握りしめて生まれた[14]。モンゴル人は子供を産んだ母親に羊の肉のスープを飲ませて体力を回復させる慣習があるのだが、このときは、そのようにはしなかった。生まれて間もない息子が手に血の固まりを握りしめているからには、また、午の年の、午の時刻に、生まれたので、普通の人間ではないことは明らかである。そんなわけで、イェスゲイ勇者は「勇者たる息子が生まれた」と言って、非常に吉兆として喜んで、烙印のない淡黄色の雌馬を屠殺して、ホエルン妃にスープを飲ませた。その雌馬の脾臓を地面に埋めて祭礼をしたのである。それから後、その場所はデルー（脾臓）をボルダク（埋めた）すなわち、それが発音として変化して、デルーン・ボルドクという名前をもつようになったということである。

チンギスの生年には幾つか説があるが[15]、この伝説ではチンギスは午の年に生まれたというから、そのうちの 1162 年（壬午）を指名しているということになる。「脾臓を埋める」という行為についていえば、筆者は十年ほど前にモンゴル国の草原地帯においてモンゴル人が羊の解体をするさいに脾臓を草の上に無造作に捨てていたのを目撃したことがある。これをみると、羊の内臓は多く食されているものの、脾臓はこの内臓には含まれていないことがわかる。脾臓を埋めたという伝説に見える行為はこうした慣習と関連があるのかもしれない。

ところで、実はこの(15)と前述の(39)は連動している。というのは、デルーン・ボルドグをビンデル村に求める人々は、ホルホノク・ジュブリをヒョウルホン河ではなく、ホルフ（xypx）河に同定しているようだからである[16]。

4．地名の変化

以上、述べてきた伝説は、政治的文脈が反映されていたり、著者の意図が透視されえたりする点で、一見、「不純な」力が働いているように思われる。しかし、伝説の大きな構成要素であると思われる地名や自然の景勝が実はそれほど確固としたものではないことに気づくとき、伝説における政治的な要素や意図の「不純性」には新たな視線が注がれることになるはずである。まずここでは、地名の不安定さを示している幾つかの伝説を紹介することにしよう。事例としては、（4）、（5）、（8）、（21）が挙げられる。ただし、（8）は、タイトルの「第一の高み」という地名が 1940 年代から「泣きの高み」や「赤ん坊の高み」と呼ばれるようになったとあり、チンギスといかなる関係があるのか不明である。ここでは、（5）のマラーの平原を事例に出しておく。

（5）デルーン・ボルドクより北のバルジ河の東と北側に長くて幅の広い空間がある。そこの草や植物は滋養分が高く、視界も絶好であるので、何世代もの世帯と家畜が慣れ親しんだ土地である。昔、ブルト勇者は歳を取ったあと、妻のマラルがこの美しい土地で暮らし、家畜の群れを放牧し馬を飼ったので、マラルの、すなわちマラーの平原と名づけるようになったという。マラルという語は、長い年月のあいだに変化してマラーの平原と発音されるようになった。

ここで登場する「マラル」とは秘史の冒頭§１に登場するコアイ・マラル（白い牝鹿）を指示しているものと考えられるが（図１参照）、下線部のように、地名の変化が指摘されていることは、地名の危うさを物語っているといえるであろう。むろん、ここにも、ダダル村がチンギスの祖先の地であることを主張しようとしている著者の意図も感じられる。（4）はこの「マラル」の夫であるボルテ・チノ（蒼き狼）の住んでいた場所についての伝説であるが、この地名もまたスミーン・ウンドゥル（寺の高み）と名前が変わったことが述べられている。これもまた変化を蒙りやすいという地名の性格をうかがわせている事例といえよう。ちなみに、ボドンチャルが狩りをしていたとされる場所について述べる（9）や、名指しはしていないものの秘史との関連でドボン・メルゲンに同定されうる狩人に言及されている（10）は、この危うい（4）と連動しているため、慎重に取り扱う必要があるように思われる。（21）では、チンギスの軍旗を祀っていたオボの名前が「軍旗のオボ」から「豊かなオボ」と名づけるように促し

たラマ僧がいたが、いまも昔の名前は忘れられてはいないとある。この事例は地名の強靭さを語ろうとしているが、地名が変化しつつあることは否定し得ない事実のようである。

5．自然や遺物の変化

地名の変化だけでなく、自然や記述の対象とする遺物の変化もまた伝説に刻印されている。自然の変化は、(11)、(12)、(16)、(33)、(38) に見られる。このうち、(33) の不思議な薬効のあるチンギスの石についての伝説は政治的文脈のある伝説として前述したが、実は、この伝説の末尾には、「その石は、1920 年代に湖の水に埋もれて見えなくなってしまったと老人たちが話している」とある。これは、まさに伝説の根拠となりうる自然の石が消滅したということであり、伝説のもとになる自然の景観が有限なものであることをはからずも露呈させている。ここで留意すべきことは、こうした自然の景観の変化は例外ではないということである。もう一つの事例として (16) の「チンギスのかまど」を挙げておきたい。ただし、末尾にある 1991 年にこの湖で見えた不思議な虹についての記述は省いてある。

(16) テムジンの生まれた家の跡地のあった丘の周りは、窪んで水が溜まり始めたという。デルーン・ボルドクの南側は防寒できるので、人々は冬、馬群の番をし、また夏の暑いときにラクダが転がり、何にでもくっつく白っぽい泥が巻き上がるのが常であった。冬、地面が凍結すると、丘の頂が割れて霜が下りるのであった。そのようなわけで、昔から丘の上にできた割れ目に木や石を投げ込むことはタブーであった。これは、チンギス・ハーンのトーント（かまど）を清潔にしておこうという敬いの信仰心である。丘の上に木や石でオボを建てることもタブーであり、太陽回りに周囲を歩いて、北側の丘の上の丈の低い太い松に馬のたてがみや尻尾、絹や木綿の切れ端を結びつけ、羊の肩などを吊り下げて祭祀をおこなっていた。長い年月、丘の下にあったが、その周囲に水が増していき、ついに大きな湖になった。1970 年代まで、湖の真ん中には小さな島があった。その島の上に、休憩する人が涼んだり、散歩する人々のための木陰をつくるものが建っていた。この島を、チンギスの生まれた家の跡地すなわちデルーン・ボルドクと言っていたという。<u>現在、その小さな島は水に埋もれてなくなってしまった。</u>

ここに挙げた (16) は純粋に自然の変化と思われる[17]。(11) の「バルジ河の島」には、前述のテンゲレク河の河口の流れが変わり、湖のような水が溜まったことが記されている。これらの事例は自然が半永久的ではなく、ごく短期間で変化しうるものであることを示唆している。とはいいながら、(11) や (16) のような純粋に自然の変化と思われるような事例がある一方で、政治的な影響がなきにしもあらずと思われるグレーゾーンとしての自然の変化と思わせる伝説もある。たとえば、(12) の「ボドンチャルの峡谷」である。ここでは 30 年代、40 年代に確認されていた峡谷が現在では木が鬱蒼と茂り、ほとんどそれとわからなかくなったと記されている。自然の変化であるとしながらも、敢えて 30 年代、40 年代という粛清の期間を明示しているところが多少気にかかるのである。同じことは、(38) にも指摘しうる。(38) では、チンギスのシャマンとして名高いフフチュという人物の洞窟と呼ばれていたその洞窟の入り口の石が 1940 年代に崩れて穴が塞がったと記述されている。こちらも 1930 年代末に吹き荒

れたシャマニズムの粛清時代と近い年代が記されている。

自然の変化だけでなく遺物の変化も観察される。(17)、(20)、(26)、(30)、(32) がこれであるが、紙幅の都合で割愛することにしたい(ただし(20)については別の観点から後述する)。

以上の政治的文脈、著者の意図、地名の変化、自然や遺物の変化といった要素は、伝説というものの現実的有り様の相関関数であると考えることができる。前者の2つは人為性、後者の2つは非人為性といえるかもしれない。ただ、両者が互いに絡みあっていることもあることは留意すべきであろう。つまり、チンギス・カン伝説というものは、12、13世紀に遡る事柄を志向しながらも、別の多くの歴史的事実を伝えている複合的言説になっているといえる。

6．秘史の影響について

以上述べてきたチンギス・カン伝説の考察を踏まえつつ、以下では別の観点からこれらの伝説にアプローチしてみたい。その観点とは、N本に見られる伝承を秘史との関連で考察することである。実は厳密に言う場合、以上述べてきた伝説についても、またそれ以外の伝説についても、秘史の影響を受けたと明確に証明できる伝説はひとつもない。とはいうものの、全く受けていないと証明できる伝説がないこともまた事実である。その理由は、伝説で確認できるのが、秘史における物語内容そのものではなく登場人物の名前であることに存在している[18]。参考のために、N本の伝説にみえる人物と秘史に表れる人物との対応を示したのが表2である。

ところで、チンギス・カンその人についての伝説として秘史に関係する可能性があるのは、チンギスが右手にくるぶしほどの血の固まりを握って生まれたという (14) に見える内容である。とはいえ、こうした一部の対応で秘史との関連を証明できるとは言えない[19]。ここで指摘すべきことはむしろ、チンギスに焦点をおいている伝説は単純なものが多いことである。たとえば、(18) は、チンギスが馬に乗ることを学んだ場所を「鐙」と呼んでいるという話である。(23) は、チンギスの推戴時にオノン河岸の丘でお香を焚いたという場所の話である。(24) は、チンギスの印璽とされる印璽が出てきた岩の話である。ただし、この話には秘史以外の文献の形跡も見られる[20]。(28) は、チンギスの鍛冶場があったとされる場所についての話である。(29) は、チンギスが遠征に出かけるときは白い種雄馬を大きな黒い軍旗の傍に連れてきて進んでいたという話である。(31) は、チンギスの武器や車を修理する鍛冶場のあった場所の話である。(37) は、チンギスが遠征する際に用いていた会合の場所の話である[21]。そして (42) は、チンギスの要塞道であったとされる場所の話である。これらはすべて秘史とは直接に関係ないといえる。つまり、チンギスを主とする伝説は、チンギスが生まれるときに右手にくるぶしほどの血の固まりをもって生まれたという以外には秘史との直接の関わりをもっていない。それゆえ、あえてN本の伝説を秘史と結びつける必要はないのかもしれない。とはいえ、チンギスが幼少の頃、異母兄弟のベクテルを殺害したことを語っている (20) などは、やはり秘史との関連をうかがわせるものである。(20) は次のような伝説である。

表2　伝説と秘史に表れる登場人物の名前の対応表

伝説番号	伝説に現われる名前	秘史に表れる名前	備考
(18) (23) (24) (28) (29) (31) (34) (37) (42)	チンギス・ハーン	テムジン、チンギス・カン	
(4) (7)	ブルト勇者	ブルテ・チノ（青い狼）	秘史の劈頭に現われる名前
(5)	マラー	コアイ・マラル（白い牝鹿）	ボルテ・チノの妻
(6) ((9) (10)	ドブ・メルゲン	ドボン・メルゲン	
(6)	ドワ・ソホル	ドア・ソホル	伝説ではドボン・メルゲンと対で現われる。ドボン・メルゲンの兄。
(40)	ホトル勇者	クトラ・カン	
(11) (12)	ボドンチャル	ボドンチャル	チンギスの実質的に遡れる祖先
(15) (17)	イェスゲイ勇者	イェスゲイ・バートル	チンギスの父
(14) (17)	ウールン妃	ホエルン	チンギスの生母
(20)	ベクトゥル	ベクテル	チンギスの腹違いの兄弟
(22) (35) (36)	ビルグーテイ勇者もしくはビレクト	ベルグテイ	ベクテルの弟
(27)	イェスイ妃	イェスイ	チンギスのタタル部から娶った妃
(38)	フフチュ・ブー	ククチュ、テブ・テンゲリ	チンギス時代に活躍したシャマン

(20) 奴婢の絶壁〔(10) で紹介されている伝説―筆者注〕よりも下に「ベクテルの木」という場所がある。そこには、羊を放牧していたベグトゥルをテムジンとハサルの二人が射たという。ベグトゥルは、もっていた家畜を追うための鞭棒をつっかえにして立ち上がり、地面に倒れこんだ。ベクトゥルを葬ってから後、彼のもっていた棒は長い期間横たわっていたので、その場所を「ベグトゥルの木」と名付けるようになった。ベクトゥルという語が変化して、現在ではブグトゥル・モド（湾曲した木）と名付けられるようになったらしい。ベクトゥルが射られたというその平らな丘の上に、現在までどの家も冬の宿営地として準備することはなく、ただそこにある草を刈り取るだけであるという。

このベクテルもそうであるが、N本に登場する人物は秘史の巻1や巻2という前半に出てくる名前である。このことは秘史と何らかの関連を示しているように思われる。ただし例外はある。その1人はククチュ、もう1人はイェスイ妃である。ククチュは、巻1と巻2に登場するモンリク・エチゲ、すなわちチンギスの父イェスゲイが死に際に自分の息子チンギスを託した人物の息子に当たるので、連続性が完全にないとはいえないかもしれない。すると、イェスイ妃だけが、巻1や2に登場しない（もしくは言及されていない）人物だということになる。イェスイの名前の見える伝説（27）とは次のようなものである。

(27) 印璽の石〔(24) 参照―筆者注〕から東のほうの山の懐の一角にある広大な場所をナマルジャー（秋営地）という。イェスゲイ勇者がそこで秋に宿営していたので、このように名付けられたという。また、チンギスの小妃イェスイの秋営地の跡もあるのだと人々は話している。

7．伝説の古層

N本で興味深いことは、チンギスを対象としながらも、むしろチンギス以外の人々の名前を考察することによって、この地域の伝説の古層なるものを引き出すことができるように思われることである。伝説に出てくる登場人物のなかでも目を引く人物として、①チンギスの庶弟ベルグテイ、②ベルグテイの兄ベクテル、③イェスイ后、そして④フフチュ（秘史ではククチュ）が挙げられる。②のベクテルは幼少の頃、チンギスとその同母弟ハサルに殺害されており、チンギス伝説としてはダーティーな側面を示すため、意味深いように思われる。そして、③のこのベクテルの弟ベルグテイの登場する伝説は3編あり、チンギス以外の登場人物としては事例が多い。つまり、この地域は、ベクテル・ベルグテイ兄弟にゆかりのある地域である可能性をうかがわせている。たしかに、『元史』巻117列伝第4によれば、ベルグテイはモンゴルから3千戸、広寧路、恩州2城戸1万1603をチンギスから賜ったほかに、オノン河やケルレン河の地に営地をもっていたとあるので、ベルグテイの子孫は内蒙古に多いと考えられるものの[22]、ダダル付近にもいることが推測されるのである。ベルグテイの伝説のひとつ（35）は全文を既に紹介したが、残る2編は、（22）、（36）である。（22）を紹介しよう。

（22）テムジンは、敵を倒して大勝して、多くの氏や部族を統一して支配するようになったという。王座にも推戴されるようになった。そして、生まれ故郷のオノン川の北側のある美しい丘を選んだのであった。そこで、背負った弓と矢筒を降ろして置こうとしたところ、台がなかったという。それで、ビレクトという相撲取りがオノン川のヨル岩の小さな切り立った岩を梃子で持ち上げて切り取って持ってきた。テムジンは、その岩の上に弓と矢筒を置いた。そして、テムジンを、白いフェルトの上に導き、座らせて、全モンゴルのハーンに推戴する大宴会を執り行ったという。それ以降、テムジンの弓と矢筒を置いたその切り立った岩をバルチ・オボと名付けて祀り、ナーダム（競技の祭典）を行なうようになった。バルチ・オボはデルーン・ボルドクから西南に30ｋｍほどのところにある。

この伝説でビレクトと呼ばれる相撲取りはベルグテイに対応すると思われる[23]。ただし、秘史にはこうしたエピソードは存在しない。いずれにしても、ベルグテイは兄のチンギスをよく助けてモンゴル帝国の建設に貢献したことは知られている。（36）は、ビルグーテイ勇者が西方に遠征に行く際に残した百人の兵士たちが1人ずつ1本の軍旗をはためかし、晩にはたくさんの火を焚いていたので、その場所をゾーン・モド（百の木）というようになったという話である。ところで、前述の（35）で登場するベルグテイに対応すると思われるビルグーテイ勇者が征西に行ってもどらなかったとあるが、これは史実ではないようである。なぜこういうことになったのかは不明であるが、これはチンギスとベルグテイの間の複雑な関係を想起させる内容となっている。

秘史においてベルグテイは度々登場し、秘史の中で有名なのは、巻4の§131においてオノン河の酒宴でジュルキン族のブリ・ボコに肩を太刀で切りつけられる話である。この話は秘史の巻1§50、巻4§136にも言及されるエピソードである。最終的に巻4§140でベルグテイはブリ・ボコと相撲をとり、ブリ・ボコの背骨を折って死に至らしめている。ここで重要だと思

われるのは、巻4§136をみると、ジュルキン族のブリ・ボコが殺される背景には、ベルグテイとの対立もあるが、彼らがチンギスのタタル部族への戦闘に非協力的であったことが大きく関係している。ジュルキン族はチンギス・ハーンの系譜的にみて同族的存在である。にも関わらず彼らがチンギスの不倶戴天の敵であるタタル征伐へ参加しないことは、チンギスには許しがたい背信行為と映ったのであろう。タタル族がチンギスの不倶戴天の敵であったのは、チンギスの父イェスゲイがタタルに毒殺されたからである。

ただし、ここでモンゴルとタタルの関係は決して単純なものではないことにも注意が必要であろう。タタル部族は、チンギスの父イェスゲイを毒殺したという点では不倶戴天の敵であったが、チンギス時代もそれ以降も、モンゴル部族はタタル部族とは婚姻関係も多く結んでいたことが、モンゴル帝国成立前後の事情を語る重要な資料のひとつである『集史』（漢語訳『史集』）のタタル部族の項に見えている[24]。つまり、両者の関係は決して単なる敵対関係といった単純なものではなく、対立しながらも共存していた集団であったといえるのである[25]。

次に注目したいのは、③のイェスイ后である。伝説においては前述のように、たった一度しか登場しないが、そうした偶然のような出現が実際には決して偶然ではない可能性がある。その理由は、イェスイ后が今述べたタタルの出身者だからである。イェスイ妃は、イェスゲンとともにタタル出身の姉妹でチンギスの妃となった人物である[26]。イェスイ妃は、タタルがチンギスによって滅ぼされたあとチンギスの妃になっている。この経緯は秘史の巻5§155に記されている。続く§156においてイェスイはタタル潰走の混乱のなかでチンギス陣営にもぐりこんだ自分の夫をチンギスに見破られ殺されている。「イェスイの夫」に対するチンギスの処遇を考えるとき、イェスイ妃は、チンギスの弟ベルグテイと運命的に似通っていることが判明しよう。前述のように、チンギスの庶弟ベルグテイは、兄ベクテルをチンギスとその同母弟ハサルに幼少の頃に殺されているからである。つまり、ベルグテイとイェスイは、チンギスとの関係において微妙にならざるを得ない人生の経緯を共有しているのである。

このような観点からみたときに、タタル部族殲滅の際にベルグテイが犯した「過ち」は新しい意味を帯びることになる。ベルグテイは、タタルを殲滅した後にその捕虜たちをどうするかの評定において、タタル族のうち車のこしきと比べてその高さまで成長している男子をすべて殺害することに決めたことをイェケ・チェレンというタタルの領袖のひとりにその決定を漏らしてしまう。この決定が漏洩したためにタタル族は最後の抵抗として懐に忍ばせた太刀で多くのモンゴル兵士を死出の道連れにしたとあり、この損害によりチンギスはベルグテイが以後、評定に加わることを禁じたことが秘史に綴られている。

ベルグテイが漏洩した相手のタタルの領袖イェケ・チェレンは、イェスイの父であり、ベルクテイの機密漏洩の話はチンギスがイェスイ妃を娶る§155のすぐ手前の§154に展開されている。すなわちベルグテイに関する事柄は、よく見ると、イェスイ妃の叙述と近接して叙述されているだけでなく、密接に関連していることが判明する。これを偶然ではないとすると、その背景について検討することは意味があろう。この場合、チンギスの父イェスゲイが娶っていたベルグテイの母の出身は不詳なのであるが、この出身をタタルだったと仮定すれば、話の辻褄がいろいろ合うことは確かである。モンゴルとタタルの関係からいえば、タタル部族から捕虜として連れてきた女性であったとしても、不思議ではない。実際、秘史巻1§59においてチ

ンギスがホエルン母から生まれるときに幼名をテムジンと名付けられたのは、イェスゲイがタタル部族との闘いでテムジン・ウゲなる捕虜をちょうど連れてきたところであったからだと説明されている。ベルグテイの母がタタル出身であるなら、ベルグテイがイェスイ妃の父であるタタル部のイェケ・チェレンに機密を漏洩した行為は、ベルグテイの真意はさておき結果的に、チンギスに単なる過ち以上の意味を与えてしまったことは充分ありえることであろう。

タタルという観点からみれば、チンギスよりも前の時代のクトラ・カンの推戴の場所についての（40）もまた関連が出てくることは興味深い。クトラは前任者のアンバガイ・カンがタタル族の裏切りによって金朝に捉えられ処刑された後に王位に就く人物であり、就任後、タタル族との闘いに明け暮れたことが秘史巻1§57に叙述されている。以上のように、①～③の人物は実際のところタタルに関連していることが観察されることは興味深いことである。

次に着目する④のフフチュ（秘史ではククチュ）も以上の考察と連動させるならば、非常に興味深い。このククチュはタタル出身者でないものの、チンギスとの関係において肯定と否定あい混ざる複雑な関係にあったからである。ククチュは、イェスゲイがチンギスの後見として託したコンゴタン族のモンリク・エチゲの7人の子供のひとりで、最初はチンギスに協力的であったが、次第に増長し、秘史巻10§245においてチンギスの弟オッチギンによって殺害される人物である[27]。重要なことと思われるのは、このククチュがチンギスに「神が汝に世界の君主となるようにと言った」という神意を伝えるとともに、チンギス・カンという称号をも与えたと『集史』に見えることである[28]。この話は後代にまで伝わるチンギスの王権神授説の根拠をなしているもののひとつである[29]。ククチュがチンギスと最初は協力関係にありながらも最終的には殺害される悲劇的人物である点で、この人物は、ベクテル、さらには身内を殺されたベルグテイ、イェスイに連なる人物といえる。

ところで、伝説には直接現われてはいないものの着目すべき人物として当然ながら想起されるのが、チンギスと協力関係にありながらも最終的に殺される人物として秘史で突出しているジャジラアト族のジャムカである。この観点から見たときに、（39）、（40）、（41）に登場するホルホノクという河がN氏の言うとおりホルホノク・ジュブリだと同定できるのであれば、ホルホノク・ジュブリが秘史でしばしばジャムカに関連して登場する地名であることは興味深い。ジャムカの名前はN本では直接には触れられてはいないものの、こうした観点から浮かび上がってくることは偶然ではないのかもしれない。ジャムカの出身のジャジラアト族は（11）、（12）の伝説で言及されているボドンチャル―チンギスの実質的に遡れる祖先ボドンチャル―と非正妻との間から生まれた息子の系譜である。

以上のように秘史との関連で伝説を考察してきたが、チンギスその人よりもむしろ周辺の人物に着目することによって伝説の古層に迫ることができたといえるのではなかろうか[30]。とくにここで立ち現われてきたタタルというモンゴルによって滅ぼされた集団の存在はN氏に意識化されていない領域であるので意味深いと考える。

8．残された問題

以上の考察で注釈も含め全く言及していない伝説について触れつつ、残された問題を以下に4点ほど指摘してまとめとしたい。

1. (6) と (7) は、秘史に登場する、ボルテ・チノ（蒼き狼）や、ドア・ソホルとドボン・メルゲン兄弟に関わる伝説である[31]。ここには古代の石碑があることに言及されており、おそらくこの遺跡は伝説の形成と関連があるのであろうが、それらの石碑がいかなるものかを現在のところ同定できていない。

2. (25) は競走馬がよく産まれるといううわさのある場所についての伝説であるが、「二頭のザガル」の生地であるというから、写本伝承としてよく知られている『チンギス・ハーンの二頭の駿馬』との関わりを考察する必要があろう。

3. (34) はいつの頃か不明であるが仲の良い夫婦が互いの名前を呼びながら落ちた谷が、その険峻さゆえに後にチンギスを敵から守ったという話である[32]。これはもともとチンギスと無関係な伝説がチンギスに結び付けられるようになった可能性があるように思われる。

4. 本稿で扱ったのは現代とチンギス時代であり、その間の時代（とくに清朝時代）はすっぽり抜け落ちている。それらの手がかりは、伝説のなかで時折触れられる寺院や仏教僧の名前や旗（行政単位）の名前となるであろう[33]。

注釈

1) Намсрай, Ц., ЧИНГИС ХААНЫ ДОМОГ ТҮҮХХТ НУТАГ, Улаанбаатар, 2002

2) ジャミヤンについては、アルヒーブ資料もしくはӨ.Чимид,Дэлүүн болдогийг сурвалжилсан нь,*Монгол түүх хэл бичиг*, No. 6.Хөххот 1959,pp.17－20、ペルレーについては、Пэрлэй, Х.,《Монголын нууц товчоо》-ны газар усны нэрийн тухай урьдчилсан мэдээ, *Шинжлэх Ухаан сэтгүүл* NO.2－3 (17－18) ,Улаанбаатар,1948.pp.58－75、バダムハタンについてはБадамхатан,С.Чингис хаан:Би энд нойрсоно.Улаанбаатар,2002.などを参考にしたものと思われる。ペルレーの論文については次の邦訳がある。小沢重男「元朝秘史に現われる地・水名を探る—ハー・ペルレー」『元朝秘史全釈（下)』風間書房 1986 年 577－596 頁

3) ただしチンギス関係の記事の網羅に努めている『チンギス研究文献目録（1900－2006）』(Нарантуяа,Ч.ЧИНГИС СУДЛАЛЫН НОМ ЗҮЙ(1900－2006),Улаанбаатар,2006) にはこの冊子の名前は見えない。

4) Сампилдэндэв, Х., МОНГОЛ ДОМГИЙН ЦОМОРЛИГ, Эмхэтгэн боловсруулж оршил бичсэн Академич,доктор/Sc,d/ профессор Х.Сампилдэндэв, МОНГОЛ УЛС ШИНЖЛЭХ УХААНЫ АКДЕМИ ХЭЛ ЗОХИОЛЫН ХҮРЭЭЛЭН, Улаанбаатар 2005,pp.156－166

5) N 本の末尾に記載されたチンギス・カンに関する頌歌は 42 編に数えていない。

6) モンゴルには「13 アルタイ」という慣用句があり、これもそれに類する表現であろう。

7) 栗林均・确精扎布編『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』, 東北アジア研究センタ叢書第 4 号, 東北大学東北アジア研究センター　2001 年　807 頁

8) 村上正二（訳注)『モンゴル秘史　チンギス・カン物語　1』東洋文庫　平凡社　1970 年 77 頁によれば、オノン河の中流域方面にあったらしいとしているが、Пэрлэй ibid.pp.72 によれば、オノンの源流にあった場所で、ここにはシャマンの祖先祭祀のたわわな木があったという。

9) N 氏には 2002 年の N 本以降 2006 年にモンゴル帝国成立 800 周年にちなんでЧИНГИС ХААНЫ ТООНТ НУТАГをУлаанбаатарから刊行しているが、この中でビンデル村説批判に相当多くの紙数を割いている。

10) 栗林均・确精扎布編 ibid.850 頁参照。

11) ただし、前述したように、チンギスの秘史で実質的に辿れる男祖はボドンチャルであり、チンギスはこのイフ・ヌドゥンとは系譜的に無関係である。しかし、モンゴル人一般には神話的といいながら、イフ・ヌドゥンは祖先のひとりとみなされている。

12) Сампилдэндэв ibid.pp.7

13) Tegüsbayar,Činggis qayan-u domuy-uud, Öbürmongyul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, Kökeqota,1998,pp.6－7.

14) 「目には火があり、顔には熾のある」は、モンゴルで聡明であることを意味し、この表現は伝統的な口頭

伝承においてしばしば好んで用いられる。

15) チンギス・カンの生年候補の主なものは、甲戌の1154年説（『蒙韃備録』）、乙亥の1155年説（『集史』）、壬午の1162年説（『元史』）、丁亥の1167年説（『親征録』）がある。

16) たとえばこうした同定をしている論客として、Ц.Дамдинжав, Д.Базаргүр, Д.Энхбаяр の名が2006年のN氏の前掲書45-46頁に挙がっている。

17) N氏の2006年の前掲書38-39頁によれば、チンギスの黄金家族につらなる出自のオチル・イルドという人物が1920年代まで「三つの湖」の北の高台に住んでいて、自分はチンギスのかまどを守っているのだと言っていたという。そしてこの人物は、「自分の幼い頃、この丘の周りにはほとんど水がなかった」と証言しているという。とすれば、この「三つの湖」の起源がそう古いものではないことをうかがわせている。それのみならず、90歳のユムジャブたち老人によると、70, 80年前にはこの「三つの湖」は互いにつながっていて東方向に流れていたというから（40頁）、現在、西の湖の水が枯れていることも合わせて（41頁）、この付近の自然が刻々と変化しつづけていることはたしかであろう。

18) とはいえ、後述するように、例外はある。

19) チンギスが血の固まりをもって生まれたというエピソードは『親征録』や『集史』にも見える。

20) この伝説では白い鳥が伝説で言及されている岩の上に座ってチンギス、チンギス、チンギスと三度啼いたとある。これはモンゴル年代記『蒙古源流』に見えるエピソードを想起させる。岡田英弘（訳注）『蒙古源流』刀水書房2004年80頁を参照。

21) この会合の場所は、外モンゴルが清朝の支配下に入る契機をつくったといえるガルダン・ボショクトも東モンゴルの領主と会っていたと伝説に付加されている。

22) たとえばヘンティ県の概説書（Саруулбуян,Ж.〔Ерөнхий зохиогч〕,ХАН ХЭНТИЙН ТОБЧООН, Улаанбаатар,2003,pp.70）にはベルクテイの子孫はハルハにもかなりいるものの圧倒的多数は中国の内蒙古地方にいるとある。

23) ベルグライはビレクト、ビルグーデイなど様々に音写されるが同一人物であろう。ちなみに筆者はモンゴル国でビルグーデイという名前の男性に会ったことがあるが、そのときにこの男性は自分の名前の由来はチンギスの弟のベルグテイであると説明していた。

24) 『集史』には、後述するイェスイ、イェスゲン姉妹とは別に、チンギスには名前は不詳であるがタタル出身の妾がいたこと、ツァガンという子供が生まれたが若死にしたこと、とはいえその子孫であるツァガン・タタールがイランの地にいることが記載されている。拉施特〔主編〕『史集』第一巻・第一分冊　余大钧・周建奇译　商務印書館　北京　172頁 を参照。

25) むろんこの背景には『集史』の部族編にも記載されているように、タタル自体も内部に多くの集団を抱えており対立関係も多くあったことも関係しているであろう。

26) イェスイは『元史』第106表第一の「后妃表」において、右第二オルドに名を連ねる10人のうちの最初に見える。

27) ただしククチュを殺害した名前は文献によって異なる。たとえば『集史』によれば、ククチュを殺したのは弟ハサルになっている。

28) 拉施特,ibid,273－274頁

29) 14世紀末に登場した中央アジアのティムール帝国の祖ティムールはチンギスが次子チャガタイに与えた千人隊のひとつであるバルラス部族の出身であるが、彼がカンを名乗らずアミール（将軍）かキュレゲン（婿）で通した背景には、王権が神によってチンギスの子孫に与えられたとするこのククチュの伝説の影響があったのだと杉山正明・北川誠一,『世界の歴史９　大モンゴルの時代』中央公論社1997年363頁に指摘されている。また同書315－317頁には、チンギスの王権神授説にはククチュの登場しない14世紀にモンゴル支配下のグルジアで記された年代記『モンゴル人侵入史』に見える別のヴァージョンもあることが紹介されている。

30) この意味において(19)は興味深い。なぜなら(19)はチンギスが13歳の頃に初めて野獣を射止めそれを弟たちが絶賛したという伝説であるが、ここではチンギスが複数の「弟たち」と対比されており明らかにチンギスに焦点が当たっているからである。

31) 本稿で事例として検討した（3）についても該当する。

32) N本ではデゲン・ジゲン夫婦は一緒に谷に落ちたとあるが、同じN氏の2006年の前掲書54-55頁ではデゲンが亡くなった後ジゲンが後追い自殺をした話になっている。

33) N本42編のうち、寺院の名前は（2）と（21）のУгтамын хийд,（4）のГилбэрийн хийд であり、仏教僧の名前は（21）のУгтамын хийд Довчин гэгээн 、また旗の名前としては（25）のБоржгин сэцэн ван хошуу である。